

夕顔

《八月十五夜の逢瀬》

八月十五日夜、陰りのない月の光が、隙間の多い板葺きの家に、すべてさしこんで来て、源氏の君はご経験のない住居の様子も珍しく感じる上に、夜明け近くなつたのでしよう、隣の家々から、身分の賤しい男たちの声が、目を覚まして、

「うおゝ、えらく寒いなあ」

「今年は、収穫も期待薄だし、田舎への行商も望めねえから、まったく心細いつたらありやしねえ。北隣さん、お聞きになつてるか」

などと言ひ交わしているのも聞こえてきます。本当に哀れな各自の生活のために、朝早く起き出してざわめいている卑しい様子が間近に聞こえるのを、女はとても恥ずかしく思っています。上品に気取るような人なら、きつとその場から消えてしまふに違いないほどの住居の有り様なのでしようね。けれども、表面的には、のんびりと、辛いことも嫌なことも気恥ずかしいこと

も、気にしている様子ではなく、自身の態度や様子は、とても上品でおっとりしています。そして、この上なく下品な隣の無遠慮さを、どのようなことか分かっているような表情ではありませんので、かえって恥ずかしがり赤くなるよりは罪がないように思われるのでした。ごろごろと鳴る雷よりも大げさに踏み轟かす唐臼の音も、まるで枕元で鳴っているかのように聞こえてくるのですが、さすがに「ああ、やかましい」と、これにはお思ひになります。何の音ともお分りにならず、とても不思議で、不愉快な音だとだけお聞きになる、そんな雑然としたことばかり多くありました。白い着物を打つ砧の音も、かすかにあちらこちらから絶えず聞かれ、空を飛ぶ雁の鳴き声も一緒になつて、堪えられないほどわびしいことが多かつたのです。

沈むのを戸惑う十六夜の月のように、急にこの場を離れることを、女はためらっています。源氏がいろいろとおっしゃるうちに、突然月が雲に隠れて、明け行く空が実に美しく見えます。明るくなつて人目についてしまわない内にと、いつものように急いでお出になつて、女を軽々と車にお乗せになつたので、

驚いた侍女の右近も乗り込みました。その辺りに近い別宅にお
着きあそばして、番人をお呼び出しになる間、荒れた門の忍草
が生い茂っていて思わず見上げられますが、それがたえよう
もなく暗く感じられます。霧も深く、露つぽいところに、簾ま
でを上げていらつしやるので、源氏のお袖もひどく濡れてしま
いました。

「今までこのようなことを経験しませんでした。いろいろと
気をもむことなのですねえ。」

昔の人もこのように恋の道に迷ったのでしうか

私はまだ知らない夜明けの道を…

あなたは、ご経験ありますか」

と源氏はおつしやります。女は、恥ずかしがって、

「山の端（あなた様）の心を知らないでついて行く月（私）は
山の端に寄り添う前に消えてしまうのではないでしうか
心細くて」

と言つて、何かとてつもなく恐ろしいと思つている様子なので、
源氏は「あの建て込んだ住まいに慣れてるからだらう」と、

興味深くお思いになるのでした。

源氏は、お車を入れさせて、西の対に御座所などを準備する間、手すりにお車の轆なつかえを掛けて立てていらつしやります。右近は、艶なまめかしい気持ちがして、過去のことなども一人思い出すのでした。番人が一生懸命奔走している様子から、何が起きているのかをすつかり知ってしまったのです。

源氏は、ほのかに物が見えるところに、車をお下りになったようです。御座所は仮のものではありますが、きちんと設けてあります。番人は、

「お供に誰もおりませんなあ。ご不便なことでしょう」

と言つて、源氏に親しい下家司しもげいじで、左大臣邸にも仕えている者でしたので、近くに参り寄つて、

「適当な人を、お呼びなさるべきではありませんか」

などと、右近に申し上げさせたのですが、源氏は、

「わざわざ人の来ないような隠れ家を探してきたのだ。絶対不本意に漏らすな」

と口封じさせなさります。お粥などを急いで差し上げますが、

取り次ぐお給仕が揃いません。いまだ経験のないご外泊に、「息長川」の歌のようにいつまでも…と契りなさるよりほかのことはありませんでした。

宵を過ぎる頃、少し寝入りなきつた頃に、御枕元にとても美しい女が座っていて、

「私がこの上なく愛しいとお慕い申し上げているあなた様は、私のところをお訪ねなさることもなく、このような、大したことのない女を連れていらつしやつて、こんなにもおかわいがりなさるなんて、まことに癪にさわり辛いことです」

と言つて、お側にいる人を搔き起こそうとする姿を、源氏は御覧になりました。

物の怪に襲われるような気がして、目をお覚ましになると、火も消えてしまっているのです。源氏は不気味にお思ひになったので、太刀を引き抜いて、そつとお置きになつて、右近をお起こしになります。右近も恐ろしいと思つている様子で、源氏のもとへ参り寄りました。源氏が、

「渡殿にいる宿直人を起こして、『紙燭をつけて参れ』と言ひ

なさい」

と右近におつしやると、右近は、

「とても行けません。暗くて…」

と言うので、

「なんと、子供みたいな」

と、源氏は少しお笑いになって、手をお叩きになると、こだまが応える音が、本当に気味悪く響きます。しかし、誰一人としてその音を聞きつけて参上する者はいません。そうしている内に、この女君は、ひどくふるえ替えて、どうしてよいか分からなくなってしまうています。汗もびっしりになって、正気を失った様子です。

「やたらと怖がりあそばす性格ですので、どんなにお怖がりのことでしょうか」

と、右近も申し上げます。

「本当にか弱くて、昼も空ばかり見ていたものだが、かわいそうだ…」

とお思いになって、源氏は、

「わたしが、誰かを起こそう。手を叩くと、こだまの応えるのが、まことにうるさい。ここに来なさい、もつと近く」

と言つて、右近を引き寄せなきつて、西の妻戸に出て、戸を押し開けなされると、渡殿の火も消えてしまつていたのでした。

風が少し吹いている上に、人も少なく、お仕えしている者は皆寝ています。この院の管理人の子供で、親しくお使いになっている若い男、それから殿上童一人と、いつもの隨身だけがいたのでした。源氏がお呼び寄せになると、それらの者がお返事申し上げて起きたので、

「紙燭をつけて参れ。『隨身も、弦打ちをして、絶えず音を立てていよ』と命じなさい。人気のない所に、気を許して寝ている者はいないか。そういえば惟光朝臣が来ていたようだが…」

と、源氏がお尋ねになりますと、

「控えておりましたが、ご命令もないので、早朝にお迎えに参上するという旨を申して、帰つてしまいました」

と申し上げます。このように申し上げた者は滝口の武士なので、弓弦をまことに手馴れた様子に打ち鳴らして、

「火の用心」

と言いながら、管理人の部屋の方角へ行つたようです。源氏は内裏を思い出されて、

「きつと名対面は過ぎたろう、滝口の宿直奏しは、ちようど今ごろか…」

とご推量になるのは、まだ、それほど夜も更けていないからではないでしょうか。

部屋に戻つて、お確かめになると、女君はそのままに臥していて、右近はその傍らにうつ伏していました。

「これはどうしたことか。ああ、何かにとりつかれたような怖がりようではないか。このような荒れた所には、狐のようなものが住みついていて、人を脅かそうとして、怖がらせるのだから。わたくしがいるのだから、そのようなものには脅されないはずだぞ」

と言つて、お引き起こしになります。右近が

「とても気味悪くて、気分が悪うございますので、うつ伏していたのでございます。ご主人さまこそ、ひどく怖がつていらつ

しやるようです」

と言うと、

「そうだ。どうしてこんなに…」

とおっしゃって、女の様子を御覧になると、息もしていません。

揺すりなさってみますが、なよなよとして意識もない様子なので、

「ああ、本当に幼い人なので、物の怪に魂を奪われてしまったに違いない…」

と、どうして良いかわからない気持ちになさるのでした。

童が紙燭を持って参りました。右近もとても動ける状態ではないので、源氏は近くの御几帳を引き寄せて、

「もつと近くに持って参れ」

とおっしゃります。いつもと違ったことなので、童は御前近くに参上できず、遠慮して、長押にも上がれません。

「もつと近くに持って来なさい。場合によるぞ」

とおっしゃって、童を召し寄せて御覧になると、ちょうどこの枕上に、夢に現れた姿をした女が、幻のように現れて、ふつと

消え失せてしまいました。

「昔の物語などに、このようなことは聞いたことがあるが…」

と、まことにこの上もないほど気持ち悪く思われますが、まずは、

「この人はどのようなようになってしまっただろうか…」

とお思いになる胸騒ぎに、ご自分のことはお考えにならず、添い臥して、

「おい、おい」

と、目を覚まさせようとなさりますが、女はもうすっかり冷たくなっていて、息はとづくに絶え果ててしまっていたのでした。

もうどうすることもできません。頼りになる、どうすればよいかとご相談なさるべき人もいません。法師などは、このような時に頼りになる人とはお思いになります。源氏はなんとかお強がりになっているものの、心はまだまだ幼くていらつしやり、女が亡くなってしまったのを御覧になると、どうしようもなく、ひしと抱いて、

「わたくしの大切な人よ、生き返って下さい。どうかこんな悲

しい目に遭わせないでくれ」

とおっしゃりますが、女はすでに冷たくなっていたので、なんとなく遠くへ行ってしまったように感じられるのでした。